転生者の幸せ探し　おまけ

咲畑珠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の幸せ探し　おまけ

【Ｎコード】

Ｎ８４６０Ｚ

【作者名】

咲畑珠璃

【あらすじ】

タイトル通り『転生者の幸せ探し』のおまけです。書きたくても書けなくなったものや、書いたものの別の人の視点の話、本編とは全く関係のない話などを書いていきます。基本的に、本編よりも一話一話が短め。時系列は関係なし、しかも不定期更新です。本編を読まなければわからないものになっているので、本編を先にお読みください。※Ｒ１５は保険です。

母と父（前書き）

ユンではなく優七だった頃の、お母さんとお父さんの話です。優七が死んだその後、二人がどうなったのか。お母さん視点で書きました。

母と父

あの子が死んでから、一週間が経った。
最後に聞いた言葉が、何度も何度も頭の中に蘇る。
そのときの優七（ゆな）の顔も、声も、何もかもが正確に。

『――ふざけんな！　どれだけこっちが今まで我慢したと思ってんだよ！　今年の初詣だって、お前らが離婚しないよう祈って！　何で今……卒業式の日なんかに、そんなこと言うんだよ！』

あのときは一瞬、誰が言っているのかわからなかったわ、とぼんやりと考える。
だってあの子は男っぽい言葉遣いはしたものの、ふざけんな、なんて言ったり、もちろん私のことをお前と呼ぶような子ではなかった。

人を傷つけることを、極端に嫌う子だった。

その台詞を言った後も、怒りに染まっていた顔はすぐに泣きそうなものに変わった。実際、瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。そして、何かから逃げ出すように優七は走り出した。
どうせすぐに帰ってくるでしょう。行動範囲が狭いし、自分の知らない場所に行くような子じゃない。
のん気に私はそう考えていて。
今は、そのことを後悔している。いえ、後悔してもしてもしたりない。

あのときすぐ追いかければ、あの子は死ななかったかもしれない。
それなのに私は優七の言葉遣いに驚いて、それから憤慨して。腹

を立ててる暇なんて、なかったというのに。

『芦萱さんのお宅ですか？』

かかってきた電話は、優七が事故にあったというもの。のん気に家に帰って、どうやって離婚を切り出そうかと考えていたときだった。あの子には離婚すると言ったものの、実際はあの人には離婚すると言っていなかったから。

電話を受けて、すぐに病院に向かった。

優七は小さな子供を助けて、トラックにはねられたらしい。

馬鹿だ、と思った。

赤の他人を助けるために、自分を犠牲にするなんて。あの後に、よくそんなことができたものだ。

病院に着いた時、あの子はもう死んでいた。打ち所が悪かった。

……でも、綺麗な顔をしていた。

違う、馬鹿なのは私よ、優七じゃない……。

自然と、涙が溢れてきた。昔は「大っ嫌い」と言ったり、暴力を振るったりしてしまっていたけれど。やっぱり私は、優七のことを愛していた。優七がどうだったのかは知らないけれど……。嫌われて、いたんじゃないかと思う。嫌いと言われたり殴られたりしているのに、その人のことを好きでいるはずがない。

ひとしきり泣いて、ふとあの人に……優七のお父さんに連絡しなくちゃと気付いた。震える手で携帯を取り出すと、丁度あの人が病

院に駆け込んできた。
私と同じように電話がかかってきたらしい。今まで時間がかかったのは、道が渋滞していたから。電話をもらってすぐに、会社を飛び出てタクシーに乗ったらしいけど。
正直、あの人がタクシーに乗ってまで、急いでここに来るとは思っていなかった。お金を大切にする人で、タクシーなんて金が勿体ないと絶対に乗らなかった。

この人も、本当は優七のことを愛していたのかしら。

泣いている彼を見ながら、そんなことを考えた気がする。
私が優七に暴力を振るっていても、この人は何もせずただ見ていた。必要最低限のことしかあの子に話しかけなかったし、もちろん一緒に遊ぶなんてこともなかった。
勇七(いさな)が自殺してから、私たちは何かがおかしくなってしまっていたのかもしれない。私もこの人も、残った優七のことを愛せなくなっていたんだろう。

そういえば……優七は、私たちが離婚しないように初詣で祈ったのよね。

あの子の写真がはってあるアルバムをパラパラとめくっていると、不意にそう思い出した。
私が離婚すると言ったとき、一体あの子はどんな気持ちだったんだろう。どんな気持ちで、あの最後の言葉を口にしたんだろう。

初詣で祈るくらい、私たちの離婚を嫌がっていた。ということは、もしかして。

頭の中に浮かんできた、小さな期待を打ち消す。

……嫌いと言った。虐待をしていた。

それなのに、あの子から好かれていたと、少しでも考えるなんて。何て私は都合がいいんだろう。

優七の写真は、勇七が死んでからあまり撮っていなかった。遺影として置いてあるのは、卒業アルバムのために撮った写真。特別に、写真屋さんで買わせてもらった。普通ならアルバムに載っているのを見るだけだけど、ちゃんとした写真として見たかった。

写真はすぐに見終わったので、パタンとアルバムを閉じる。

そのままの状態でぼうっとしていると、隣の部屋から物音が聞こえた。

そうだ、あの人がいるんだった。

……離婚、結局切り出せなかったわ。今話そうかしら。

立ち上がると、足がしびれていた。気付いていなかったけど、長い間座っていたらしい。

自分の部屋を出て、あの人の部屋へ向かう。ノックをしようとして、直前に手を止めた。

離婚をしましょうと言ったとして。あの人はすぐにうなずくはず。そうしたら離婚が成立するまであっという間だ。

あの子の願いは、それで完全に叶わなかったということになる。

優七は、わがままを滅多に言わなかったわ。

勇七が死んでからは、三年に一度聞けば多いほどだった。
あのときわざわざ口に出したということは、『お前らが離婚しないよう祈って』は、あの子のわがまま。最後の、わがままだ。
優七は子供の癖に、わがままが少ない。わがままを言っても、私やあの人がそれを叶えることはなかった。
最後のわがままくらい、叶えてあげないと。本当に、親失格になってしまう。もうとっくに失格になってるかもしれないけど。

トントン、と扉を叩く。中から声は聞こえてこない。そういえば、葬式が終わってからまだあの人の声を聞いていない。
私は気にせず、扉を開けた。あの人は机の横に、うなだれながら座っていた。私が入ってきたことに気付いているのか気付いていないのか、ちらりともこちらを見なかった。

「……優七は」

優七、という名前に、初めてこちらを向く。

「今年の初詣に、私たちが離婚しないことを願ったんですって。……あの子の最後のわがまま、叶えてあげたいのよ」
「そうか」

つぶやいてうなずく。私が離婚したがっていたことは薄々わかっていたようだから、こう言っておけば私に離婚の意思がないことはわかるはずだ。

そのまま自分の部屋に戻るのは何だか嫌で、彼の隣に座る。

私は、この人のどこが好きになったんだっけ。そもそも、いつ出会ったのか。

思い出しながら、彼の顔を見つめる。

出会ったのは、大学で同じ講義を受けたとき。好きになったのは……どうしてだろう。全く思い出せない。思い出せそうなのに思い出せないのは、何とも気持ちが悪い。

こんなことさえ、勇七が死んでからは考えることはなかった。

何となく、彼の頭をなでる。一瞬彼は驚いたように目を丸くしたけど、おとなしくされるがままになっていた。四十過ぎにもなって、なでられるとは思っていなかったに違いない。私も、この歳になって夫の頭をなでることになるとは思っていなかった。

沈黙の時間が過ぎていく。その沈黙は、気分の悪いものではなかった。今までだったら、こんなことでさえも苛立っていたんだろうに。

「……貴方は、どうして私と結婚しようと思ったの？」

プロポーズは、私からだった。

どうしてこの人が、私と結婚しようと思ったのか。訊いたことはなかったし、気になることもなかった。

「特に理由はない。……あえて言うなら」

「言うなら？」

「好きだから」

真顔でそう言うものだから、余計にこっちが恥ずかしくなる。そ

うだった、この人はこういう人だった。こっちが赤面するようなことも、恥ずかしげもなくさらっと言ってしまう。本人は恥ずかしいなんてこれっぽっちも思っていないから。本当のことしか言わないので、今言ったことは本当なんだろうけど。

「もちろん、今も好きだ」

「……はあ？」

確かに好きだったから、ではなく好きだから、と言っていた。過去形ではなかった。

でも、だ。そうだからとは言え、今このタイミングでなぜそれを言う必要が？

「私は、昔は好きだった」

「そうか」

本当のことを伝えると、彼はさっきと同じようにうなずいた。その顔が少し寂しそうで、罪悪感がわいてくる。

だから、言い訳のように言葉を続ける。

「でも、これからまた好きになるよう努力したいわ」

「そうか」

「努力すれば、何事も上手くいくと思うの」

「そうか」

「……貴方はそれしか言わないの？」

三回連続、返事が「そうか」だ。

むっとして言うと、彼は目を瞬いた。もう立派なおじさんと言ってもいい歳なのに、なぜか可愛く見えてしまうのが不思議だ。そもそも、外見はおじさんよりもお兄さんに近い感じなのだけど。同い

年なのに彼の方が若く見えるのは少し納得できない。

「じゃあ。……頑張れ」

「……気が抜けるのはどうしてかしら」

私はため息をついた。

そしてふと、この部屋に来る前よりも気持ちが楽になっていることに気付いて、つい彼の顔を見る。不思議そうにしている顔。きっと、彼は意識してやっていなかったんだろう。

ああ、そうだわ。こういうところが好きなんだった。

すとん、と納得する。思い出せなかったことが思い出せて、胸のつかえが取れた気分だ。……これは間違いなんだっけ。随分前、驚きながら優七が言っていたことを思い出す。正しくは、『胸のつかえが下りた』。取れる、ではなく下りる、だと。どちらでも使われてはいるのだけど。

「……あのね」

彼は首をかしげる。

「私、貴方のこと、またすぐに好きになれそうな気がするの」

「そうか」

「……だから何でまたその答えなのよっ」

怒ったように言いながらも、心の中では怒っていなかった。むしろ、笑いたい気分だ。

どうして私は、彼と離婚したいなんて思っていたんだろう。そんなことを思わなければ、優七は死ななかった。……私の、せい、で。優七は……。

うつむくと、ぽん、と頭の上に何かが乗っかる。顔を上げて目に入るのは、泣きそうな笑顔の彼。

何も言わず、彼は首を振った。

それが合図だったかのように、後から後から涙が溢れて。

「……うっ…」

泣くなんて、駄目だ。もう十分泣いたんだから。これ以上泣く資格なんて、私にはない。

だけど涙は止まらなかった。

せめて、と私は泣き声だけは上げないようにした。気付くと、彼のまぶたは閉じられている。これで、私が泣いているのがわかるのは私自身だけ。

泣いて泣いて泣きまくって。

気付いたら眠ってしまっていたらしく、ベッドの中だった。あの人が私をベッドに運んできたみたいだ。

隣で眠っていた彼を、驚いて蹴り落としてしまったのは……ええ、私は悪くないわ。

母と父（後書き）

お母さん視点は書きづらかったです……。

次の話はユン視点の話。

スプーン（前書き）

ユンとシリルが会った日の話。『第一話　孤児院』でほんの少しだけ書いていたものです。
千文字ちょっとなので、短めです。しばらく書いていなかったのでユン視点も書きづらかったです……。

スプーン

シリルの分がなくて、私の分がある。
テーブルの上にはちゃんと人数分の皿が置いてあるというのに、本来ならシリルの分だった皿は空っぽだ。

「……シリルのごはんは？」

状況がわかっていないのか、シリルは首をかしげてこちらを見てくる。その無垢な顔に、私はため息をついた。私の分はあるのだから早々に自分だけ食べてしまおうと思っていたのに。シリルにあげなくては、私が悪者のようではないか。
私は満足げな笑みを浮かべている、犯人らしき子供たちを睨んだ。こういう嫌がらせは、シリルに対してのものではなく私に対しての嫌がらせになってしまうのだから気をつけてほしいものだ。

「はい。シリル、ごはん」

私の分のご飯をシリルの前に置くと、ぱっと顔を輝かせる。キラキラした笑顔で食べ始めて、ふと私のほうを見る。
どうしたんだ？

「ユンのごはんは？」

……子供の癖に、そんな心配するなんて。この歳の子供なんて、他人のことなんて考えず自分がよければいい、と思うのが普通だろうに。シリルのご飯を食べた子供たちのように。
ちらっとそちらを見ると、びくっと面白いほど体を震えさせる、アリシェル、マノン、クルファの三人。アリシェルとマノンは女の

子で、クルファは男の子。この子達はよく三人でいる仲良し組みだ。いたずらが好きな子達だが、たまにいたずらの度が過ぎることがあって困る。
視線をシリルに戻して、私は質問に答えた。
「わたしの、ごはん、ない」
「ない？」
うなずくと、シリルはスプーンをくわえながら、料理と私の顔を何度も交互に見た。……子供なんだから気遣いなんて必要ないぞ。私もお腹、減ってはいるけども。
しばらくの間シリルは迷っていたが、やがてスプーンを口から離し、ぐいっと私に押し付けてきた。
「みんなでたべたら、おいしい」
だからって……どうしてそのスプーンをそのまま渡してくるんだ？　子供だからそういうことは気にしないのかもしれないが。
んー、私のスプーンはあるのだが、渡されたのだからこれを使ったほうかいいか？
「ありがとう」
受け取って、シリルの皿からほんの少し料理をもらう。今日は、里芋っぽいものを揚げたものだった。ほくほくサクサクしていてとても美味しい。やっぱり院長の料理は美味しいな……。
「おいしい」
私が言うと、シリルはにっこり笑った。……その笑みが少し黒く

見えるのはどうしてだろう。いや、気のせいだな。多分。
そういえば私がこのスプーンを使っていては、シリルが何も食べられなくなってしまう。私用のスプーンは使っていないし、それを使ってもらったほうがいいだろうか？
シリルに使っていないスプーンを渡そうとすると、なぜか不満げな顔をする。自分のスプーンじゃなきゃ嫌なのだとしたら、変なところでシリルは子供っぽいな。
仕方なく持っているスプーンを渡すと、ぱあっと顔を輝かせた。

「……ユンとおなじスプーン」

喜んだ理由はそれらしい。なぜ会って間もないのにこんなになつかれているかは疑問だが、子供になつかれるのは悪い気はしない。
……で、そこで微笑ましげにこっちを見てる院長！　にこにこ笑ってないで、アリシェルたちに注意してください。その笑顔で怒られるのって怖いから。

「はい」

院長を軽く睨んでいると、私の口の前にスプーンが差し出される。スプーンを持ったシリルは、眩しいほどの笑顔だった。もしかして、私に食べさせるつもりなのか？
別に食べさせてもらわなくてもいいんだが……まあ、子供らしく、差し出されたものは遠慮なく食べるか。
ぱくっとスプーンを口に入れると、シリルがもっと嬉しそうな顔に。これ以上嬉しがらせたらどんな顔になるのか、少し気になる。シリルは普通に食べ出したから、もう私に何かをさせるつもりはないんだろうが。
それにしても、美味しそうな顔して食べるなあ。素直にこんな顔して食べるのって子供のうちだけだから、シリルもこんな顔しなく

なるんだろうな。そう思うと、何だか考え深い。

ぐーと小さくお腹が鳴ったが、シリルのこの顔を見れたから別にいいか、という気持ちになった。

スプーン（後書き）

次の投稿はいつになるかわかりません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8460z/

転生者の幸せ探し　おまけ

2011年12月26日21時07分発行